

第3節 南箕輪村における「かま塾」の活動

～こどもの居場所づくりと文化の創造・継承～ (長野県南箕輪村)

三浦正士 (長野県立大学グローバルマネジメント学部 講師)

【調査の概要】

調査日 2024年12月11日(水)

調査場所 南箕輪村役場

調査先 南箕輪村 地域づくり推進課 高橋里江氏 こども課 武井香織氏
かま塾 高見利夫氏、田中博美氏、河野道夫氏

調査者 三浦正士

【南箕輪村の概要】

西に中央アルプス連峰の経ヶ岳・駒ヶ岳、東に南アルプス連峰の仙丈ヶ岳・東駒ヶ岳を望み、伊那谷の一番広い平地の中心に位置する南箕輪村(みなみみのわむら)は、長野県南部、天竜川の上流に位置し、日本のほぼ中心にあり、中央道西宮線などの高速交通網の整備により、東京・名古屋から約2時間半、全国各地からのアクセスが飛躍的に便利になってきている。



また、2006(平成18)年2月には権兵衛トンネルが開通し、これまで車で1時間30分を要していた木曾と南箕輪村が、トンネルの開通により30分で通行できるようになった。さらに、リニア中央新幹線などの高速交通網の整備も計画されており、交通網の急速な進展により、ますます全国各地が近づくこととなる。

天竜川西岸の河岸段丘には緑濃い田園地帯と畑作地帯が広がり、肥よくな大地を形作っており、なかでも豊かな自然を代表する大芝高原は、さまざま

なスポーツ施設や宿泊施設、また温泉施設も完備され、自然を存分に楽しめる素晴らしい環境に恵まれている。

1875(明治8)年に筑摩県(当時)の田畑村、神子柴村、大泉村、久保村、南殿村、北殿村が合併して南箕輪村が発足して以来、一度も合併することなく今日に至っており、これは長野県内でも稀有な例である。2025年には村制施行150周年を迎える。

＜南箕輪村の基礎データ＞

面積 40.99 km²

2020（令和2）年国勢調査人口 15,797人

2022（令和4）年度決算（普通会計）歳出総額 7,845百万円

2022（令和4）年度財政力指数 0.54

（村HP等より）

1. 南箕輪村の人口流入と地域コミュニティ

南箕輪村は、いわゆる地方創生において、先進事例として注目を集めている。この間、移住者の増加が続いており、住民の7割を移住者が占めるに至っている（図1）。また、2018（平成30）年から2022（令和4）年の合計特殊出生率は1.61であり、長野県内でも上位に位置している。国立社会保障・人口問題研究所が2023年12月23日に公表した「日本の地域別将来推計人口（令和5年集計）」によれば、2020年の人口と2050年の推計人口を比較して、長野県では22.8%減少するのに対して、南箕輪村は長野県内で唯一の人口増加となることが推計されている¹。2021年の村長選挙において、地域おこし協力隊員として移住した経歴をもつ藤城栄文氏が当選し、全国初の事例²として注目されたことも記憶に新しい。

それでは、なぜ南箕輪村に移住者が集まっているのか。この問いに対して、確たる理由を提示することは難しい。村では、①周辺自治体と較べて地価が低い傾向にあり、新居を構えるにあたっての負担が相対的に少ないこと、②いち早く子育て支援策を進めてきたこと、③これらがいまって「ロコミ」が徐々に広がり、さらなる移住者の獲得につながっていることが要因であると分析している。

確かに南箕輪村では、いち早く保育料を値下げしたり、福祉医療費給付の充実を図ったり、乳幼児や保護者の交流と子育て相談の拠点である「すくすくはうす」を開所したりと、全国に先駆けて子育て支援に取り組んできた。一方で、例えば保育料に関しては2019年から保育料の無償化がはじまるなど、国レベルの施策も進展しており、必ずしも他自治体との明確な差別化が図られているわけではない。

移住相談での移住希望者とのやり取りからも、「ロコミ」が大きな要因になっているという。村の充実した子育て支援政策は、移住者の満足度を高め、南箕輪村の「ロコミ」評価を高める一因となっていることは間違いない。一方で、行政

¹ 国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（令和5年推計）」
<https://www.ipss.go.jp/pp-shicyoson/j/shicyoson23/t-page.asp>。

² 田村秀「都会から人を呼び込む！—南箕輪村と飯田市の挑戦—」長野県立大学グローバルマネジメント学部編『信州に学ぶ地域イノベーション』中央経済社、p.63。

施策のみが「ロコミ」の内容を構成しているわけではあるまい。「住みやすい村」をつくりあげていくためには、村行政のみならず、地域コミュニティのあり様やさまざまな地域活動が重要な要素となる。

南箕輪村において、こどもの居場所づくりや地域の伝統文化の創造・継承のために活発に活動を展開している地域活動団体のひとつが、「かま塾」である。南箕輪村の政策展開については、第4章第7節で考察することとし、以下では「かま塾」の活動について概観し、本研究会のテーマである地域社会の課題解決のために必要となるコーディネーター的な人材の必要性や役割を展望したい。

人口の推移

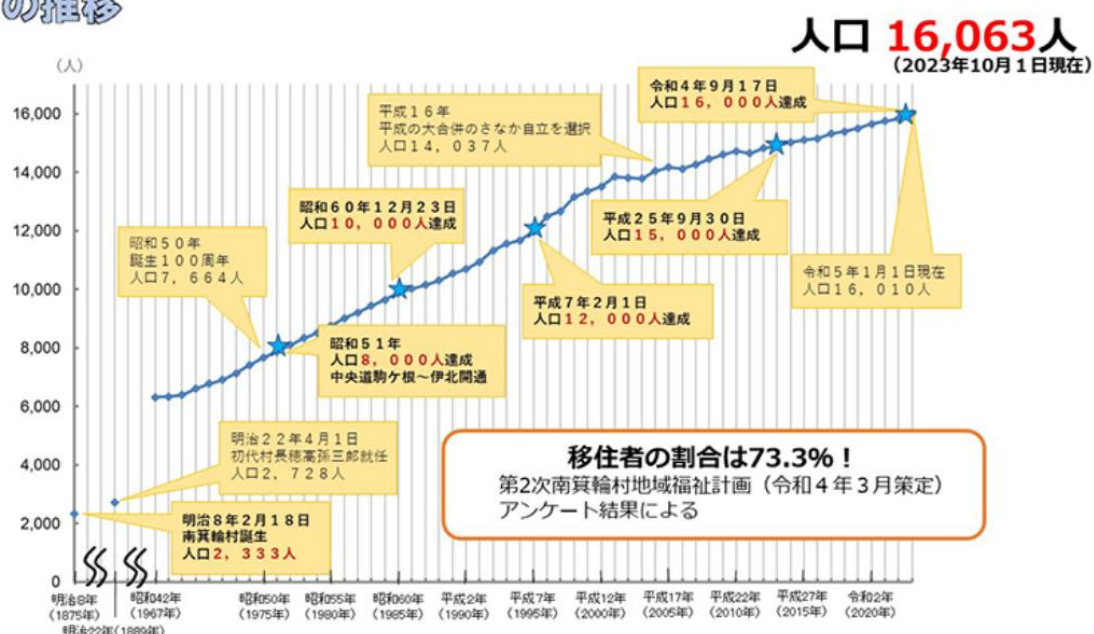


図1 南箕輪村の人口の推移
(出典：南箕輪村提供資料)

2. 「かま塾」の設立経緯と活動内容

「かま塾」は、南箕輪村の神子柴地区 (848世帯、人口1690人)³で活動している地域活動団体である。地区との関わりあいのなかで、すべての人が尊敬しあい、心を通じあって共に生きられることを願い、地域の伝統文化の創造・継承や子どもの居場所づくりを目的に活発に活動を展開している地域団体である。小中学生を対象に、こどもの社会性の育成に向けてさまざまな行事を開催しているが、地域の誰でも参加することができ、心豊かなふれあいの集まりにすることをめざしている。

³ 南箕輪村「2023 南箕輪村 村勢要覧」p.5。



「かま塾」の活動拠点となっている神子柴公民館（筆者撮影）



「振り万灯」の様子（2023年ふるさとCM大賞 NAGANO「かわいい子には旅をさせよ 南箕輪村ふりまんどろチーム」）

「かま塾」は、20年以上にわたって活動を続けてきた歴史をもつ。その始まりは、2001（平成13）年に、小中学校の週5日制が導入されるにあたって、こどもの居場所づくりに地域として取り組むべく設立された。当初は、土曜日に公民館を開放してこどもの居場所とするとともに、広く地域住民の交流の場としていくことから活動がスタートした。

活動を進めるなかで、こどもが楽しめるイベントを開催しようと流しそうめんを行ったのを契機として、徐々にさまざまな行事を行うようになっていった。図2が、「かま塾」の2024年の活動内容である。これらの行事のうち、複数回にまたがる恒例行事となっているのが、「万灯」（まんど）に関する諸行事である。これは、大麦で作ったわら束に火をつけて振り回すことで、お盆に先祖を迎え地域の伝統行事である。前年10月の種まきに始まり、6月に刈取り・脱穀を行ったうえで、8月に万灯を作成し、お盆に迎え万灯と送り万灯を行う。これらの行事はPTAと共催で実施されている。

万灯をはじめとする伝統行事のほか、プラネタリウム見学や地域の文化財巡りといった文化活動、サツマイモや落花生などの苗植え・収穫といった農業体験、木工作品や絵手紙の作成といった創作活動など、「かま塾」の活動内容は実に多岐にわたっている。このような活動展開を可能としているのが、第一に「サポーター」の存在である。組織体制については後述するが、例えばサツマイモ等の苗植えや収穫にあたっては、普段農業に従事しているサポーターが苗を寄附するとともに、苗植えの際に子どもたちに植え方を指導したり、あるいは学校教諭だった経歴をもつサポーターが子どもたちに植物の生長について教えたりと、各々の得意分野や経験が生かされるかたちで活動が行われている。

| 月 日 | 行事名 | 参加者数 | 備考 |
|--------|---------------------|--------------------------------|-------------------|
| 1月6日 | 書き初め会 | 子ども15人/保護者5人/サポーター8人 | |
| 〃 | どんど焼き | 小学生・保護者等約50人 | |
| 2月3日 | ピンポン・ポッチャ交流会 | 子ども10人/保護者3人/サポーター・ピンポンふれ愛12人 | 「ピンポンふれ愛」の協力 |
| 2月24日 | 西部集会所にてお楽しみ会 | 子ども27人/保護者18人/サポーター8人 | 神子柴西部集会所にて開催 |
| 3月9日 | 義務教育終了を祝う会 | 中学3年生9人/保護者3人/サポーター・地区社協理事他30人 | 地区社協と共催 |
| 5月18日 | サツマイモ、スイカ、落花生の苗植え | 子ども8人/保護者4人/サポーター15人 | 中学生がボランティアでカレーを提供 |
| 6月8日 | 大麦の刈取り | 子ども15人/保護者13人/サポーター15人 | PTAと共催 |
| 6月22日 | 大麦の脱穀 | 子ども11人/保護者12人/サポーター13人 | PTAと共催 |
| 〃 | 新一年生の入学を祝う会 | 小学1年生6人/小学生・保護者・来賓・サポーターなど41人 | 地区社協と共催 |
| 7月20日 | 灯籠（竹灯かり）作り | 子ども14人/保護者10人/サポーター4人 | 「楽笑会」の協力 |
| 7月21日 | ふれあいしょうぼうひろば | 子ども31人/保護者17人/消防団員他11人 | 消防団と共催 |
| 8月3日 | まんど作り | 子ども10人/保護者11人/サポーター9人 | PTAと共催 |
| 8月10日 | 魚つかみ大会 | 子ども21人/保護者10人/サポーター12人 | |
| 8月13日 | 迎えまんど | 子ども10人 | PTAと共催 |
| 8月14日 | 神子柴区夏祭り 子ども神輿の披露 | 子ども約30人/保護者 | |
| 8月16日 | 送りまんど | 子ども15人/高校生も参加 | PTAと共催 |
| 8月17日 | 木工作品作り | 子ども12人/保護者9人/サポーター7人 | 地域おこし協力隊員の協力 |
| 9月7日 | 子ども神輿贈呈式 | 約150人 | 「一休さんのはなおか」より寄贈 |
| 9月14日 | 絵手紙教室 | 子ども3人/保護者3人/サポーター5人 | 「絵手紙の会」の協力 |
| 9月21日 | かま塾の子どもたちと地域文化財巡り | 子ども6人/保護者3人/サポーター・歴史の会13人 | 「歴史の会」と共催 |
| 10月26日 | サツマイモ、落花生の収穫、大麦の種まき | 子ども22人/保護者6人/サポーター13人 | |
| 11月16日 | ヤキイモ作り | 子ども20人/保護者6人/サポーター13人 | |
| 11月24日 | プラネタリウムと御子柴遺跡石器見学 | 子ども14人/保護者7人/サポーター5人 | 伊那文化会館、伊那市創造館で開催 |
| 12月7日 | しめ縄作り | 調査時点で不明 | |
| 12月14日 | 絵手紙カレンダー・干支の置物づくり | 調査時点で不明 | |

図2 2024年の「かま塾」の活動内容
(出典:「かま塾」だより各号を基に筆者作成)

第二に、各種団体との連携である。地域文化財巡りでは「歴史の会」、絵手紙教室では「絵手紙の会」など、地区内で活動するサークル・住民団体と連携した活動が多く見られる。さらには、PTA や地区社協、消防団、あるいは地域おこし協力隊員などと連携した行事の企画・運営も活発に行われている。このように、「かま塾」では、サポーターをはじめとする地域住民の個性を生かすとともに、多様な主体との連携を進めており、それらが活動の担い手の確保や活動内容の充実につながっているのである。

3. 「かま塾」の組織体制

それでは、「かま塾」は、いかにしてこのような充実した活動を 20 数年にわたり継続することができたのか、また多様な主体との連携を進めることができたのか。組織や担い手の観点から考えたい。

本調査では、「かま塾」の活動を支える中心的なメンバーである、高見利夫代表、田中博美事務局長、河野道夫氏の 3 名にお話を伺うことができた。さまざまなお話を伺ったが、そのなかでも特に興味深かったことのひとつが、「かま塾」が必ずしも明確な組織体制を構築していないという点であった。「かま塾」は、詳細にわたり明文化した規約をつくっているわけではなく、また特定のメンバーが長期間にわたって代表などの主要役職であり続けているわけでもない。代表と事務局長のほか、中心的なメンバーとなっているのが「サポーター」である。これは、初代の代表であり「かま塾」が軌道に乗るまで粘り強く活動を続けてこられた原輝夫氏が高齢により引退された際に、活動を継承するために都合のつくメンバーを募ったものであり、地区住民を中心に 10 名程度のサポーターがいる。ただし、サポーターが毎回の行事に必ず参加しているわけではなく、当日都合が付き、また農業、スポーツなど、行事の内容に応じて専門性をもっているサポーターがボランティア的に集まって行事を開催しているという。行事予定の連絡についても、メンバーに個々に連絡して出欠を確認するような明確なかたちはとっておらず、毎月発行し地区内に回覧している「かま塾だより」の末尾に今後の予定を記しているのみであるという。

このように、「かま塾」では、地区住民のある種“緩やかなつながり”のなかで活動が行われているが、意図的にこうした体制をとっている側面がある。組織体制を明確化してしまうと、メンバーの義務感が強くなってしまい、「かま塾」の行事に関わることが“重荷”になってしまう恐れがある。事務的な負担も大きくなる。「かま塾」の活動の理念に共感していても、「あまり活動に縛られすぎたくはない」という地区住民も少なくない。そうしたなかで、“緩やかなつながり”を通じた自発的な参加によって行事が成り立っていることが、「かま塾」の活動

が 20 数年にわたり継続できている秘訣であるように感じられた⁴。また、古くからロータリークラブの「花の会」が結成されており、地区住民のボランティアで環境保全活動を行ってきたことが、「かま塾」の活動においても地区住民が自然とボランティア的に集まる素地になっているという。こうした自治的活動の蓄積が「かま塾」の土台となっていることを強調しておきたい。

4. 活動を支えるメンバーたち～コーディネーター的人材の観点から～

本調査に協力いただいた 3 名に、それぞれどのようなきっかけで「かま塾」の活動に参加するようになったのかを伺った。高見氏は、自身も移住者であり、学童保育の指導員をされるなかで「かま塾」との接点を持ち、立ち上げの初期から関わりをもってきたという。立ち上げ時から関わるメンバーが少なくなるなかで、「かま塾」をよく知る存在として、会長を担っている。田中氏は、もともと保護者として「かま塾」の行事に参加したことが、関わりを持ったきっかけであるという。行事に参加するなかで、運営を担うサポーターを手伝うようになり、後に自身もサポーターの一人となり活動に深く関わるようになった。河野氏は神子柴地区で育ったが、大学進学を機に南箕輪村から転出して以降、長らく地区との関わりは持たなかった。定年退職を機に神子柴地区に戻り、何らかの形で地区と関わりを持つべく活動するなかで区長となり、そこで「かま塾」と関わりをもつようになったという。元区長として地区のことをよく知る存在として、さまざまな面で活動のサポートを行っている。

「かま塾」では多様な主体と連携しながら、活発な活動を展開している。そこで、「かま塾」が活動を展開するうえでコーディネーター的な人材が存在しているか伺ったところ、田中氏が活動のマネジメントや各主体との連携において重要な役割を担っていることが明らかとなった。まず、「かま塾」の組織内の「調整」役となっている。子どものために活動するという「かま塾」の理念をメンバーが共有していても、その実現方策は多様であり、ともすれば思いの強いメンバー間の意見衝突もある。そのなかで、田中氏が間に入って調整役となり、「かま塾」の潤滑剤となっている。田中氏によれば、各活動分野でリーダー的存在を決め、その意見を尊重することが活動を円滑にする秘訣であり、役割分担を意識することでメンバーの負担の分散も図られ、持続的な活動につながっている。さらには、組織外のさまざまな主体との「渉外」役ともなっている。子ども食堂事業を展開する「まほうのおなべ」など、村内のさまざまな地域活動と親しい関係を築いている。昨年からは地区社協の活動にも関わっているという。「村内では住

⁴ 一方で、こうした“緩やかなつながり”による組織運営が支障となることもある。「かま塾」においても、活動の予算不足に陥っており、一時期神子柴区自治会に支援を依頼したが、区自治会の予算化にあたって組織の明確化や活動目的・理念の明文化を求められたという。

民がさまざまな活動を行っているが、あまり知られていない。地区社協の一因として、住民の活動を発信していきたい。」と、南箕輪村の住民の力が強いことを語る姿が印象的であった。

このように、「かま塾」においては、田中氏が、組織内の意見を「調整」しつつ役割の「分担」を進め、組織外の各主体との「渉外」の役割を担うというかたちで、コーディネーター的な役割を担っている。一方、行政側のコーディネーター的人材の存在は、本調査では確認できなかった。ただし、「かま塾」が村行政との関わりをもたずに活動しているわけではない。「地域活動支援事業補助金」の交付を受けて活動しているほか、各課から講演等の依頼を受けることも少なくないという。先述のように、南箕輪村は明治の大合併以降に市町村合併を経験していない“コンパクト”な村であり、行政と住民に“顔の見える”関係があることが、特定のコーディネーター的人材によらずとも村行政と地域活動の連携がなされている素地になっていることが調査を通じて垣間見えた。この点については、第4章第7節で改めて触れたい。

5. 今後の展望

一方、新たな担い手の確保と活動の継承という点では、課題が見られる。かつての田中氏のように、活動の手伝いをしてくれる保護者は多くいるが、まだ子どもが小さいため運営に深く関わるということまでは難しいという。20 数年にわたり活動を継続するなかで、「かま塾」の立ち上げ当初に活動に参加した子どもたちが 30 歳代になっている。今後は、このようなかつての参加者が子どもを連れて保護者として参加し、ひいては「かま塾」の運営に関わってくれることが期待されている。



子ども神輿贈呈式の様子(かま塾だより 256号より)

2024年9月7日、「かま塾」の活動拠点である神子柴公民館において、150人を超える参加者に見守られ、子ども神輿贈呈式⁵が盛大に執り行われた。神子柴地区はもともと伝統行事がそれほど多くないわけではなく、神輿もなかった。地区の夏祭りでの神輿のお披露目では、子どもだけでなく大人たちも四苦八苦しなから神輿を運行し、一から創りあげていく楽しさを味わったという。来年には、村の大芝高

⁵ 長野県内で仏壇・仏具・墓石販売事業を営む企業「一休さんのはなおか」による地域文化活性化事業「あなたのまちへお神輿贈呈」を通じて贈呈を受けたもの。

原まつりに参加して神輿を運行することを検討している。「かま塾」の活動を通じて、子どもたちへの伝統文化の継承だけでなく、新たな地域の文化の創造がなされている。

神子柴地区は東西に細長い地区で、小学校区も南箕輪小学校と南箕輪南部小学校の2つに分かれているため、地区内の交流や意思疎通がしにくい面があり、区自治会に加入していない住民も一定数いるが、そうした住民も「かま塾」の行事に参加している。子ども神輿贈呈式でも、区自治会に加入していない地区住民の参加が見られたという。「かま塾」の活動への参加が、神子柴地区に関心をもってもらうきっかけにもなっている。

南箕輪村の調査を行ううえでの仮説は、人口増加をもたらしている多くの移住者の獲得、またその要因となっている「ロコミ」の形成は、村行政の政策展開のみならず、地域コミュニティのあり様やさまざまな地域活動によるところもまた大きいのではないかというものであった。地域活動の展開が移住者の増加につながっていることを証明する確たるデータは存在しないが、「かま塾」による子どもの居場所づくりや伝統文化の創造・継承の取り組みが、健やかに子どもを育てる場としての地域の魅力を高めるひとつの要素となっていることは疑いなくであろう。今後も「かま塾」の活動が次世代に継承されていくことが期待される。